

江戸時代出現まで

著者	田中 優子
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	7
ページ	51-86
発行年	2009-10-29
URL	http://doi.org/10.15002/00022614

江戸時代出現まで

田 中 優 子

「鎖国」論にひそむもの

和辻哲郎に『鎖国—日本の悲劇—』（和辻、1982）という著書がある。これは1500年代からの宣教師たちの動きと、1630年代の、渡航禁止令など「いわゆる鎖国」に至る経緯を生き生きと活写した名著である。

しかし、江戸時代には「鎖国」という言葉がなかった。そのような法律も存在しなかった。「鎖国」とは、1801年に志築（しづき）忠雄がケンペルの『日本誌』のオランダ語版の一部を訳して「鎖国論」とした時から始まったのである。ちなみに原書はドイツ語であり、その英訳がオランダ語に訳されたものが、オランダ語版である。

具体的に言えばこういうことだ。1633年、奉書船以外の日本船の渡航、帰国が禁じられた。在留五年未満の者以外の帰国禁止例が出たのである。この指令は17箇条に渡るもので、長崎に発令された。奉書船以外であるから、幕府のお墨付きのある船は外国に出て行っていた。その同じ年、オランダ商館長の江戸参府が始まっている。オランダ人一行が長崎から街道を使って江戸まで毎年、行くようになったのだ。こうして一般の日本人たちは、日本国内でヨーロッパ人たちと接することになった。

翌年の1634年、前年同様の禁止令が、再び念を押すように発布された。この年、薩摩藩は京都へ来た琉球の冊封謝恩使と年頭使を将軍・家光に会わせ、幕藩制に編入してしまう。琉球使節がこうして、この年から始まった。琉球は外国である。やはり同じ年、長崎の町役人25名により出島が構築された。この年から1637年までに、日本と台湾間の貿易は四倍にふくれ上がる。その窓

口は、日本人を妻にもつ中国人貿易商の鄭芝龍である。この息子が後の鄭成功だ。

1635年、すべての船の海外渡航と帰国を禁じ、中国船を長崎に集中させた。このときまでの朱印船は300数十隻にのぼり、海外渡航者は10万人ほどいたとされるので、縮小であることは間違いがない。この年、内戦終結の要となる参勤交代制度が始まった。同時に、朝鮮半島とのあいだで、外交書類の書き方をめぐって起こった文書偽造事件「柳川事件」が落着し、朝鮮向け称号が「大君」となり、朝鮮の馬上才（馬上サーカス団）が来日している。翌1636年、これを受けて、日本に正式な朝鮮通信使が来日するようになった。オランダ東インド会社からは、日光東照宮に釣鐘灯籠が贈られる。そして1639年、宣教師の密入国やキリシタンへの物資輸送を助けていた、小型船「ガレウタ船」への渡航禁止令が出される。

以上が、後にまとめて「鎖国」と呼ばれるようになった五回の指令である。どれも鎖国令とは呼んでおらず、しかも同時並行で、オランダ東インド会社との、セキュリティ対策も含めた正式な関係、秀吉が侵略した朝鮮半島との、関係回復と正式な外交の発足、琉球王国との決して平等とは言えない新たな関係、そして、そのころ明のアモイ沿岸防衛総督を務めていた鄭芝龍との強い結びつきによる台湾との貿易拡大がおこなわれている。

これを「国が鎖された状態」と言えるだろうか。あるいは江戸幕府に「国を鎖す」意志を感じるだろうか。何よりこの時代から、庶民は日本の歴史上初めて、江戸へ移動する外国人たちと接触することになったのである。江戸で蘭学が開かれたのも、オランダ東インド会社船に乗船してくるさまざまなヨーロッパ人医師たちとの、江戸での接触の結果であった。

そのような経緯があったにもかかわらず日常の言葉として「鎖国」が定着したのは、1801年よりさらに後であろうと思われる。近代になって「開国」という言葉が生まれたことが「鎖国」観を定着させたのであろうが、さらにそれをすすめたのは、和辻哲郎の『鎖国—日本の悲劇—』であったのではないかと。副題に「日本の悲劇」とあるように、和辻哲郎は江戸時代に「鎖国」がなされた、という考えと、それが日本の悲劇であった、という考えとをもっていた。これはなぜなのだろうか。

和辻哲郎が『鎖国—日本の悲劇—』を準備し書いたのは、戦中戦後にかけてである。その動機は「序説」の冒頭に見られる。

太平洋戦争の敗北によって日本民族は実に情けない姿をさらけ出した。……何がわれわれに足りないのかを精確に把握しておくことは、この欠点を克服するためにも必須の仕事である。その欠点は一口にいえば科学的精神の欠如であろう。合理的な思索を蔑視して偏狭な狂信に動いた人々が、日本民族を現在の悲境に導き入れた。

ここまでで、敗戦への苦々しい思いが、この本の動機であったことがわかる。しかし敗戦と鎖国はいったいどのような関係があるのだろうか？日本が太平洋戦争へ突入したことは、むしろ近代化の結果であった。和辻にとっての問題は戦争をおこなったことではなく、負けたことではなかっただろうか。もし戦争に勝っていたらこのような本にはならず、江戸時代を含め、日本を礼賛する内容になっていたのか、あるいは著書は書かれなかったのかも知れない。なぜなら、この著書の中には、戦争をおこなったこと自体や、朝鮮、満州、インドシナ、インドネシアへの侵略および植民地支配と、琉球を盾にしたことへの苦々しい思いは何も書かれていないからである。最初から最後まで一貫しているのは、アジア諸国と日本の関係の欠落と無視であり、ヨーロッパへの劣感である。

和辻はヨーロッパの動きを「視界拡大の運動」と賞賛している。日本人には無限探求の精神、視界拡大の精神、冒険心が欠けていた、だから我々は戦争に負けたのだ、という筋道になっている。欧米に負けたことへのくやしさがにじみ出ている。江戸幕府のアジアとの関係に注目すれば、鎖国という言葉への疑問が生まれてくるはずなのだが、それは一切ない。むしろ、一般的な意味でアジアを論ずることはある。インドや中国が西方文化と長いあいだ関わりをもっていたことにも、言及している。しかしそれについて、次のように書く。「にもかかわらずそれが対等の取り扱いを受けないのは、近代ヨーロッパとの接触以後に、相拮抗するだけの文化的発展をなし得なかったからである」と。この場合、「対等の取り扱いをする」のは誰か。むしろヨーロッパ諸国である。日

本や中国やインドがヨーロッパを「取り扱う」のではなく、ヨーロッパが日本や中国やインドを、自分と対等かどうかを判断する主体なのである。「文化的発展」の内容も、終戦当時のヨーロッパ文化（というより科学であろう）を基準にしているのは明らかだ。ラス・カサスが『インディアスの破壊についての簡潔な報告』で報告した南米の状況について、和辻は「しかしこの非人道的な征服事業の内にもきわめて強健な探検の精神が動いていたことを我々は見落としてはならない」と書く。もし私なら書くことは逆だろう。「この探検の精神の内側にも、非人道的な征服事業という裏があったのだ」と。グローバリズムの動きは大航海時代の一六世紀に甚だしくなったが、アメリカ大陸のインディオたちはその最初の犠牲者だったのである。そこへ送り込まれたのがアフリカ黒人たちだ。これが見習うべき「科学精神」の内実だ。

メキシコやペルーの話は、他の文脈でも出てくる。それは、キリスト教を恐れて「国を閉じるに至った」ことを「冒険心の欠如」として非難するくだりである。それに続けて和辻は、「当時の日本人がどれほどキリスト教化しようと、日本がメキシコやペルーと同じように征服されるなどということは決してあり得なかった」と、かなり「科学的」ではない論を展開する。これはメキシコやペルーや、その他植民地化された国々への、無意識の優越感かも知れない。全体として『鎖国—日本の悲劇—』には、ヨーロッパ、日本、アジア、中南米の順からなる序列意識がよく現れている。

ここから考えるに、『鎖国—日本の悲劇—』を含めほとんどの「鎖国」論には、以下のような問題点がある。

- 1、「鎖国」という言葉があったかのように使われる。
- 2、「開国」を善で「鎖国」を悪とする背景には、無条件の欧米崇拜がひそんでいる。同時に、アジア蔑視や無視が見られる。
- 3、拡大、雄飛、外へ出る、ということが価値あること、とされる。そこには、縮小、収めること、内へ向かうこと、への軽蔑が見られる。
- 4、ヨーロッパと言っても、16、17世紀初期ではスペインとポルトガルである。この二国で当時「科学が進歩」していたかどうか考えるべきで、江戸時代を通して通商していたオランダ（アムステルダム）に比べれば、スペイン、ポルトガルとの断絶が何ほどの意味があったか、わかるはずである。「開国」

の契機になったアメリカ合衆国もヨーロッパとは異なる。欧米崇拜とはいわば白人崇拜で、欧米をいっしょくたに考える傾向がある。

「鎖国」という外交

最近で「鎖国」という言葉を冠している本に、ロナルド・トビ『「鎖国」という外交』（トビ、2008）がある。鎖国に「鎖国」とかぎがつけてあるように、この本はまず、従来の鎖国史観に疑問を呈するところから始まっている。それは著者が四十二年前、秀吉の朝鮮侵略に続く江戸時代の朝鮮通信使に行き会ったからであった。欧米崇拜をもたない欧米人であるからこそ、それほど早い時期に鎖国史観を疑うことができたのかも知れない。むろん現在では多くの研究者が鎖国史観に批判的だが、いずれも欧米崇拜とは縁遠い人たちである。

しかしそういう日本人の研究者や論者には、二つの種類がある。ひとつは、日本のすることは何でも正しい、と考えがちな人たちで、欧米崇拜者がひっくり返っただけの日本崇拜者だ。彼らはどちらかというと戦国時代や維新期の戦いの物語を好み、アジア諸国を一段階低く見ており、物事を序列で考える傾向がある。鎖国史観に批判的なのは、日本のどの時代も「良い時代」で、日本人はいつも正しいからである。江戸時代に実際には多くのヨーロッパ文化が導入されていたことに敏感で、アジアとのつながりにはあまり関心がない。

もう一種は崇拜傾向もアイデンティティー願望も薄い人々で、懶惰で好色でおかしみのある江戸文化を好み、アジア文化をその連続線上で捉えている。私自身はこの中に入るかもしれない。

ところでロナルド・トビ『「鎖国」という外交』は、朝鮮通信使とその行列に、二つの章を費やしている。近世日本の外交方針は、決して「国を閉ざす」という消極的なものではなく、「江戸幕府が主体的に選択していったもの」だという基本姿勢の上で、この本は書かれている。そして対馬——朝鮮王国、薩摩——球王国——中国、松前——蝦夷——ロシアという、長崎——オランダ東インド会社以外の出入り口についてもはっきり捉えている。

確かに、鎖国史観を崩すためには、まず日本人の朝鮮侵略と向き合わねばならない。ロナルド・トビは日本名「文禄・慶長の役」を必ず朝鮮名「壬辰・丁

西倭乱」と併記している。1590年に派遣された朝鮮の通信使に対して秀吉は、中国を征服するための軍に通行の便宜をはかるよう要求し、それが拒否されると1592年、朝鮮に出兵したのだ。しかも秀吉自身は、一度も朝鮮半島に行っていない。指令を出すだけである。トビの本には記述がないが、そのときの日本兵への鉄砲配給率は、立花統虎（もととら）の部隊を例にとると14%（文禄の役）から26%（慶長の役）にのぼっており（洞、1991）、その様子は絵画にも描かれた。鉄砲というハイテクを大量に投入することで、朝鮮王国から中国全土、インド、インドシナ半島、フィリピンまで入手できるという、秀吉の思い込みによる自信が引き起こした海外侵略であった。こういうばかげた戦争も、近代の拡大主義者たちには「雄飛」と言われたのである。

しかし中国は周辺諸国と冊封（さつぽう）の関係を結んでいた。中国皇帝のもとに諸国の王が臣下として配置され、国王は年に一度、北京の皇帝に朝貢使節を送る。その関係のもとに、もし王国が侵略されたなら中国軍が支援に入る、という一種の安全保障条約である。朝鮮王国も琉球王国もマラッカ王国も、中国の冊封国であった。日本の軍が入って行けば、それを迎えるのは朝鮮軍だけでなく、中国軍でもあったのである。『宣祖実録』の宣祖26年4月12日の記録には、

仍出示取用各様軍器。又取率暹羅都蠻小西天竺六番得楞國苗子西番三塞緬國播州鎧鉞等。

という文章が見える。朝鮮の兵曹長が、明の副司令官を訪ねた時のシーンだ。副司令官は様々な兵器を見せ、次に兵隊たちを並べてそれぞれの技を披露させた。彼らは多様な民族で構成されていた。暹羅はタイ、西番はチベット、小西天竺はインド、苗子は雲南のミャオ族、緬國はミャンマー、播州は中国の貴州、都蠻は、南シベリアのトゥヴァカチベットである。つまり当時、中国軍の中には、タイ人やミャンマー人、インド人、チベット人、その他様々な中国少数民族が含まれていたということだ。

また宣祖31年5月26日の記録には、

異面神兵使之進見。上曰何地之人而何技能為耶遊擊曰自湖廣極南波浪國人也。

とある。ここで遊撃とは、明の遊撃手、彭信古のことである。朝鮮国王が明の遊撃兵が連れて来た「異面」の人物について、どこから来た人間で、どういう能力があるのか問うたところ、湖南の南より来たポルトガル人で、鉄砲を撃つことができ、海に潜って敵の船を攻撃することができるのだ、と話す場面である。つまり明の軍隊の中には、ポルトガル人までいたのである（「宣祖実録」および崔官、1994）。

撤退するとき、日本人たちは、大量の書籍、印刷機械とともに、銅活字をソウルから奪ってきた。その数、10万字以上と言われる（崔官、1994）。翌年には、その朝鮮銅活字による『古文孝経』が、後陽成天皇の勅版として刊行されている。その後、日本では銅活字を模範にして日本製銅活字や木活字を作り、それが日本の活字出版を生み出した。活字出版で京都に最初の出版社が出現し、その後版木に転換したとはいえ、朝鮮活字は江戸時代の膨大な出版の基本になったのである。佐賀藩の鍋島直茂が工人をともなって朝鮮より帰国したのは1597年の2回目の出兵の後だった。磁器の鍋島は、そのようにして出来上がった。

トビは、日本に連れ去られた朝鮮人捕虜の数は、数万人を下らないだろう、と推測している。捕虜は東南アジアやヨーロッパに奴隷として売られたり、陶工にさせられたり、家臣に組み入れられたりした。江戸時代の武士の中には、朝鮮民族の子孫が少なくなかったようだ。江戸時代に入ってから、家康は捕虜の送還に取り組んだ。約1400人の捕虜を送還し、そのことが朝鮮通信使につながったのである。1643年までに帰国した捕虜は6300人あまりに上ることを、トビは『「鎖国」という外交』の表で示している。戦国時代には確かに多くの宣教師たちが日本にいたであろうが、本当の意味での外交がおこなわれたのは、「鎖国」と呼ばれていた江戸時代に入ってからであった。

私は、江戸時代にこのように本格的な外交が始まった理由は、よくもあしくも世界がグローバリズムの渦に巻き込まれていたからだと考えている。これは外交が始まった理由、というだけでなく、江戸時代という時代が生まれた理

由が、そもそもそういうものだと思っている。たとえば秀吉はなぜ朝鮮侵略をしたのだろうか。1590年に派遣された朝鮮の通信使に、秀吉は、中国征服の便宜をはかるよう要求している。翌年の1591年には、秀吉はインド副王に禁教を伝え、フィリピンには降伏勧告して来貢をうながしている。それをおこなった上で、1592年に朝鮮半島に兵を送った。すでに書いたように、秀吉の側には膨大な鉄砲をもっている、という自信があった。日本の鉄砲製造はそもそも、1543年にポルトガル人が王直の倭寇ジャンク船に乗って鉄砲の売り込みに来ようとして種子島に漂着したことがきっかけになっている。この鉄砲はマラッカ式と言い、ヨーロッパではなくマラッカで作られていた。朝鮮侵略の50年も前、日本はすでにグローバルな動きの中に巻き込まれ、前後も知らぬ戦国時代に突入し、やがてそれを江戸時代によって「収め」「治める」のである。

倭寇イメージの登場

グローバリズムの動きを捉え、国と国とのあわいを動き回り、それらを毎日のように結びつけていたのは、東シナ海では、倭寇集団であった。倭寇には前期倭寇と後期倭寇とがあり、大航海時代の動きに対応するのは、中国人を多く含んだ後期倭寇である。ともかく、このグローバリズムの担い手である「倭寇」の動きを見てみよう。

14世紀ごろからの中国の歴史書や記録や物語類には、頻繁に「倭寇」が登場するようになる。それまでは中国はさほど日本に関心をはらっておらず、中国にとっては、たくさんある周辺蛮国のひとつにしかならなかった。しかしこのころから中国・朝鮮の記録の中に増えはじめる倭寇の記録は、日本とアジア諸国との新しい関係が始まったことをうかがわせる。むしろその関係は好ましいものではなかった。この非難に満ちた記録こそが、今日につながる日本のイメージの出発点だったのである。まず、現代の中国では、このころの日本について子供たちにどう教えているのだろうか。

1988年に編纂された『中国の教科書の中の日本と日本人』（関根、1988）によると、中学の歴史の教科書の明王朝のくだりには、次のような倭寇の記述が

あるという。

元王朝の末年から日本の九州一帯の封建諸侯は武士や商人、海賊などを集めて常に我国沿岸地区を騒がせた。沿岸の住民は彼等を「倭寇」と呼んだ。明王朝の中期、海上防衛が弛み倭寇は猖獗を極めた。浙江、福建一帯の大地主、大商人は倭寇と結託して略奪を行ない分前に与かった。…（中略）…彼等は人を殺し放火し略奪した。そして略奪した財産を数百隻もの船に積み込んで運び去ったのである。

日本人から見て驚くことは、倭寇の活動が単なる海賊行為ではなく、日本の「封建諸侯」が武士、商人、海賊にやらせたことである、という認識をもっていることだ。つまり、倭寇の行為は一部の犯罪者の行為ではなく、日本の国の単位と不可分の事柄であり、その責任は日本そのもの（今現在の国家ではなくとも）に帰する、という脈絡になっている。さらに、倭寇と結託していた中国側の海賊を、「大地主」「大商人」と呼んでいる。これは、この海賊行為が中国の「民衆」とは関わりがなく、（すでに人民中国が撲滅した）中国の地主・商人階層とのみ結びついていたことを強調するものである。ここに省略した部分ではさらに、中国の売国商人の手引きで倭寇が沿岸を襲ったこと、沿海の人民が自ら武装して、明の軍隊とともに倭寇と戦ったことを強調している。16世紀には倭寇のメンバーは、多数の中国、朝鮮の民衆と、1、2割にすぎない日本の民衆と、そしてマレー人やタイ人やポルトガル人によって成り立っていたことは、ここには述べられていない。そしてこのような表現から、実体はさておいて、倭寇は中国における日本人の歴史的イメージを、今日までの脈絡に沿って作りあげることに関わっていることがわかるのである。

倭寇の構成員問題、倭寇とは結局何だったのか、という問題を措いておくと、その残虐性については確かに、繰り返し歴史書や物語のなかで語られてきた。中国の明の時代の徐学聚の『国朝典彙』には、倭寇が米倉や民家を焼き払い、墓を盗掘し、赤子を竿にくくりつけて沸騰した湯をそそぎかけ、妊婦をつかまえてきて女兒か男兒か賭けをして、腹を割く、と記述している。しかし石原道博はその著書『倭寇』で、この幼児と妊婦の話が、その後の歴史書にもワンパ

ターンで繰り返されることに注目した。茅元儀の『武備志』にも葉向高の『四高考』にも、その他『皇明留台奏議』や『籌海図編』にも、張燮の『東西洋考』や鄭曉の『皇明四夷考』にも、同じ場面が描写されているという。倭寇の残虐性があるところの襲撃された人々の記憶に深く刻み込まれているのは確かであろう。が、まったく同じ場面が繰り返し目撃され記録されるのは不自然で、これは引用や孫引きの繰り返しの結果に見えるのである。そしてこのような繰り返しが、倭寇のイメージ、つまりこのころの日本人のイメージを固定化させていたのである。その後これは外国人一般のイメージに飛び火したらしく、ポルトガル人には、幼児の食人の習慣があるように記録されることもあった。ちなみに、この幼児を食す習慣は、むしろ古代中国の習慣として、日本人に記憶されているものである。

倭寇とグローバリズム

元の時代、マルコ・ポーロは「黄金の国ジバング」の噂をヨーロッパに持って帰った。砂金を中国に運んだのは、中国が宋の時代、日本が平安時代のことである。そのころの噂が、200年の後、ヨーロッパに伝わった。そして1492年、イスラム圏との関係で大きな転換期を迎えたスペインのコロンブスが、黄金の国ジバングをめざして航海に出るのである。コロンブスは、アメリカのエスピョラ島をジバングだと思い、キューバを中国だと思い、大陸全体をインディアスだと思ったと、航海記に記録されている。「黄金の国ジバング」と「倭寇の国日本」——このまったく異なる二つが、同じ時代、ヨーロッパとアジアに与えられた日本の最初のイメージだったのである。

14世紀の日本は、混乱の極みだった。平安時代から武家時代に移った時よりも、より大きな変動と混乱が日本に渦巻いていた。そのことは倭寇の活発化と無縁ではない。

明が成立する直前、1336年、後醍醐天皇が吉野へ居を移した。すなわち南北朝の分裂である。このことは倭寇にとって何を意味するだろう。単にソマリアのように、戦争状態が海賊を生み出した、ということではない。力が真っ二つに割れた結果、武家勢力と結びついた北朝は定住農業民を基盤とし、一方天

皇権力を打ち立てようとする南朝は、非農民の水軍や悪党を基盤にして成り立ったのである。

南北朝の対立は日本にとって、結果的に、天皇権力の崩壊だった。この後の天皇は早くも権威の「象徴」と化すのであり、日本の象徴天皇制はこの時、長い歴史を刻みはじめたのである。後醍醐をリーダーとした天皇権力の最後の拠り所は、倭寇とつらなる海賊（水軍）勢力と、「悪党」と呼ばれる職人的な武士団だった。山伏の格好をした夜盗、強盗、山賊、海賊が、この悪党の仲間たちである^(註1)。鎌倉幕府は一貫して、悪党の取り締まりを続け、元寇の時からはそれを理由に、取り締まりの範囲を九州にまで広げたという。しかし中世の非農民系の人々の勢力は依然として強く、強大な軍事力を持っていた。様々な取り締まりの中で不満を募らせていた悪党たちは、やがて、幕府と対立する後醍醐の武力に編成されて行ったのである。倭寇の存在は、日本と切り離して単なる犯罪者として考えるべきではなく、日本のこのような現実勢力のひとつとして考えるべきである。

中国の教科書に載っているという、「元王朝の末年から日本の九州一帯の封建諸侯は武士や商人、海賊などを集めて常に我国沿岸地区を騒がせた。沿岸の住民は彼等を「倭寇」と呼んだ」という記述は、実は大きくは間違っていない。鎌倉幕府方、あるいは後の足利幕府方の諸侯はともかくとして、後醍醐方についていた諸侯は、悪党をその武力としていたのであり、倭寇もまた一部であったろう。

後醍醐の息子、護良（もりよし）が吉野に入って挙兵したとき、彼等を支えたのは山伏や山の民たちだったという。やはり後醍醐の息子、征西將軍宮・懷良（かねよし）親王を九州まで送り届けて行ったのは、まさにこのような水軍のネットワークだった。伊勢・志摩、瀬戸内海、海賊たちが懷良親王を助け、九州まで送り届けたのだった。とりわけ忽那（くつな）島の忽那氏は、三年の間懷良親王をそこに滞在させ、九州への道を作って行った。1346年には、熊野水軍が南朝の理論的指導者・北畠親房の命を受けて懷良親王のために動いている。次の年、懷良親王は菊池氏の援助のもと、肥後に入った。やがて征西將軍という位置について1361年ごろには太宰府を制圧し、その権限は九州のみならず伊予にまで及んだのである。

この権力は1369年ごろピークとなるが、同時にそれが敗退の始まりだった。この年、明の使節が懷良親王を「日本国王」と認め、明への入貢と倭寇の禁圧を要求してきた。南北朝時代の真っ最中である。いわば懷良親王は日本の代表として国際的承認を得たようなものだが、こともあろうにその使節を、懷良は斬ってしまった。明は使節を送り込む前年、1368年に成立したばかりだった。まだ日本には、蒙古の日本侵略の記憶が残っていたのである。明は繰り返し使節を送り、説得を重ねる。そして1371年、三度目の使節の時、懷良親王はついに中国への入貢を決意する。

しかし日本国王懷良、の名は続かなかった。今川了俊の軍が迫っていたのである。翌年やってきた明の使節は、九州に勢力を揚げつつあった今川了俊に拘束される。そのときはじめて、幕府側勢力は、懷良親王がアジアの中でいつの間にか「日本国王」となっていることを知ったのである。幕府は衝撃を受けた。

当時中国の朝貢体制に入った国の領主は、必ず、中国皇帝の臣下であることを示す「国王」を名乗らねばならなかった。それと引き替えに、世界で有数の豊かな国、世界まれに見るハイテク国家、中国との有利な貿易を展開することができ、しかも、その軍事力の傘の下に入ることができるのである。蒙古の支配によって、アジア諸国の中国への信頼は一時そがれたとはいえ、やはり中国は敵にまわすべきでない国だった。中国の朝貢体制は、東アジア体制の柱なのである。その範囲は朝鮮、ヴェトナム、琉球のみならず、明代にはタイ、ラオス、ミャンマー、フィリピン、マラッカにまで及び、アジア貿易の主要な部分を覆っていた。もし懷良親王が日本国王の権限のもとに中国に軍隊の出動を要請したら、幕府軍は中国軍と戦わなければならないのである。このころの日本に、勝ち目はなかった。

幕府は、倭寇が連れて来た明国の俘虜150人を送還し、幕府側こそが、倭寇を制圧できる、日本国王を名乗るべき勢力であることを、明にアピールする。しかし明は、懷良国王の名前しか、受け入れなかった。

ところで、この時期の中国側の記録には、奇妙なことがある。明の記録と正式書類の中の国王名は、「懷良」ではなく「良懷」となっているのだ。理由は明確でない。しかしともかく、窮地に陥った北朝側勢力と島津氏は、この存在しない国王の名前を使って、明との交渉に入ったのだった。これは単なる間違

いではないだろう。何らかの事情によって、架空の王が作られていたのである。この、九州王国の架空の王、良懷は、やがてすぐに、消えて行ってしまう。九州は北朝の手に落ち、南朝側の人々は、九州の山中と海へ、散って行ったのだった。

この動きの中で重要なのは、14世紀の日本の国内権力闘争も、国際関係も、いづれにも、倭寇が深くかかわっていることである。倭寇の始まりは13世紀にさかのぼるが、「倭寇」という名称が定着し、その動きが急激に活発になるのは、1350年ごろである。これは南北朝争乱のちょうど真中の時期であり、勢力の拮抗しているピークにあたる。そしてすでに述べたように、倭寇をその構成要素とする「悪党」こそが、南朝側の主要な武力集団だったのである。村井章介は『アジアのなかの中世日本』で次のように書いている（村井、1988）。

日本の一四世紀は悪党の時代でもある。倭寇と悪党が無縁のものでなかったことは、大隅守護今川了俊にあてた幕府御教書に、「当国悪党人等、高麗に渡り狼藉を致す由の事、厳密に制止を加うべし」とあることでもわかる（『禰寝文書』永徳元年八月六日幕府御教書案）。この事例や、倭寇の初発と承久の乱、その本格化と観応の擾乱、その最盛と南北両党の九州争奪戦——のように、倭寇の諸画期と日本国内の戦乱とのあいだに並行関係の認められる事実は、倭寇が国内の社会状態や政治過程と有機的に結びついていることを示している。また、高麗末期や元明交替期の海防のゆるみが、倭寇の跳梁を許したことは容易に想像できる。したがって、一四、五世紀の交における日・朝・中三国の政治変革と国際関係の新局面は、倭寇を平和的な通交者に転身させることになる。

国際関係で言えば、当時の朝鮮と中国の対日本外交の目的は、もっぱら倭寇禁圧の要請であった。明からの入貢要請も、そのことを目的にしていた。が、周知のように、懷良親王と後の足利義満のごく短い時期をのぞいて、日本は入貢の要請に応じたことはない。従って、この時期以外、「国王」の称号を持ったことがない。いかなる主従関係の下にも、日本は入るまいとしていたのである。

瀬戸内海賊

一方朝鮮王国は1419年、倭寇の根拠地をたたく目的で、対馬を攻撃する。室町幕府はすみやかに使者を派遣する。表向きは大蔵経を求める、という名目だった。大蔵経は10世紀に中国から賜った以降、日本では江戸時代まで復刻しなかったが、朝鮮半島では繰り返し復刻していたのである。

大蔵経は中国から日本と朝鮮へ、朝鮮から日本へと、功德のために賜るものだったのである。この順番が、まさに文明の高さの順位である。日本からの使者が送られた次の年の1420年、大蔵経をたずさえて朝鮮からの使者、宋希璟（ソン・ギヒョン）が日本にやってくる。その時の記録『老松堂日本行録』（宋、1987）には、瀬戸内海を通るときの海賊への恐怖が書かれている。海賊は国外に出て行くばかりでなく、瀬戸内海を通る朝鮮船や琉球船も、強奪の対象だったようだ。宋希璟は、瀬戸内海の蒲刈に近づいた時のことを次のように書いている。

其の地に東西の海賊あり。東より来る船は、東賊一人を載せ来れば、則ち西賊害せず。西より来る船は、西賊一人を載せ来れば、則ち東賊害せず。故に宗金、錢七貫を給いて東賊一人を買い載せ来る。

海賊はやたらに暴力をふるうわけではないようだ。この場合、狙いは通行税であるから、安全に通りたいなら、なにがしかの金を払って、海賊をひとり船に乗せる、という方法がシステム化している。「買い載せ来る」と表現しているが、この場合一時的に船に乗ってもらうだけであろう。しかしこの「買う」という表現の中には、中国、日本、朝鮮の間にあった、人身売買の語感がうかがえる。

倭寇は中国・朝鮮の沿岸に行くと、主に米と人間を略奪して帰って来た。これは、実際に年貢に使う米が足りないせいで、中国・朝鮮から持ってきた米は日本の中央に収められている。人間も労働力として売ったり、戦力として次の出港時に利用したりする。

しかしもっと残酷な人身売買も行われた。義満による倭寇の中国への売却で

ある。これは、義満が中国に「国王」の称号を認めてもらい、朝貢システムの中に入ろうとしたときに起こった。義満は倭寇征伐の証拠として数度にわたり、多くの倭寇を中国側に引き渡し、その返礼として銀 1000 両、銅銭 15000 貫、おびただしい錦織を受け取っていたという。このころの日本にとって、銅銭は必需品だった。これらの倭寇は明に引き渡された後、煮殺しにされている。しかも引き渡された倭寇の多くは、南朝系の遺臣や海賊であった、と言われている。

本題に戻ろう。また同じ日の記録の中で宋希璟は、船を見に来た蒲刈の住人の中に、立ち居振る舞いや言語が、朝鮮人にそっくりな僧侶を見つける。なにゆえなのかは書いていないが、対馬や九州ばかりでなく、瀬戸内海に至るまで、14、15 世紀当時の倭寇船とそれをめぐる行き来の中、相当数の人間の往来があり、中国・朝鮮に住み着く日本人も、日本に住み着く中国・朝鮮人も、いたと考えられる。朝鮮政府もまた、戦国時代のあいだじゅう、日本の西国大名たちとの交際をとだえたことがなかった。このような行き来を見ると、外交の目的はあくまで倭寇取り締まりであるにせよ、16 世紀の朝鮮侵略以前、長いあいだ、朝鮮と日本は政府レベルでも、倭寇レベルでも、頻繁な交流があったことがわかる。

倭寇を避けようとする朝鮮の努力は、このような外交努力に限らなかった。1426 年から、日本人の貿易のための港を三浦（3つの港）に開いたのである。三浦とは、富山浦、齋浦、塩浦のことである。この三浦に倭館（日本商館）を置いて、主に対馬人を中心とする日本人に、貿易にあたらせていた。倭寇の勢力を平和的な貿易に転換させるためである。それ故、その貿易も厳しい統制のあるものだった。そしてこの厳しい貿易制限のもとでは、密貿易が絶えなかった。しかし食料を朝鮮半島に頼っていた対島は、密貿易なしでは生き延びることができない。さらに統制を強めてゆく朝鮮に対して、1510 年、ついに日本人の反乱が勃発する。「三浦の乱」と言われるものである。朝鮮王国は、日本人の暴力の次に、飽くことのない交易の欲求に悩まされていた。

すべては倭寇問題によって動いていた。

李朝朝鮮は、中国の賊と日本の賊の暴力へのレスポンスとして、作られたものだった。まず、倭寇をコントロールできないでいる高麗王朝があった。そこ

へ、中国から漢民族の仏教結社・紅巾の賊が侵略してきた。さらに、日本から倭寇が侵略してきた。それらを李成桂（イ・ソンギェ）が完全に制圧したことをもって、李王朝が成立したのである。そして中国の明は、その紅巾の賊によって、作られたのだった。

倭寇は確かに海賊だが、中国の政権交替に登場する主人公たちもまた、賊である。紅巾の賊の末裔、明の初代皇帝・朱元璋と最後まで覇権を争った張士誠の反乱グループには、最初に『水滸伝』を編纂した施耐庵も加わっていた。まさに現実こそが、『水滸伝』の世界なのである。この張士誠の残党たちは、倭寇と結託して中国沿岸で海賊を働いていた、という。日本もまた、もし南朝が政権を握っていたなら、倭寇はまったく異なる存在として語り伝えられて来たとはいえない。

倭寇から海商へ

村井章介は、15世紀以降の、東南アジアに進出してゆく日本人海商もまた、倭寇の末裔と見る。実際、朝鮮の三浦には日本商館ができ、対馬の商人たちがそこを拠点として貿易するようになる。また、まだ琉球が貿易のピークを迎えていた15世紀では、日本人の東南アジア貿易は琉球に頼ってのみ、可能であった。そのころ、倭寇の連れて来た朝鮮人俘虜たちは、ものと引き替えに朝鮮に返還され、あるいは、琉球にも売られていたという。倭寇が中国沿岸や朝鮮半島から大量の俘虜を連れて帰るのは、単に次の戦いの先頭に立たせる、というだけではなく、俘虜自体が、商品として売買可能だったからだ。

初期の倭寇はともかく、やがて倭寇船団が朝鮮人、中国人、マレー人、タイ人、ポルトガル人を乗せた大船団に成っていった。混血もさぞかし多かったであろう。日本人はおよそ二割にしか過ぎなくなっていった。それと並行して、海商たちの貿易圏は、東南アジア諸国やインドやイスラム圏に拡大していった。むろん、この海商というものと倭寇の区別は厳密にはできない。しかし、倭寇が東アジア外交の中で、様々な取り締まりに会い、また、貿易圏の拡大に魅力を感じて、次第に海商に転じて行ったことは容易に想像できる。後に東南アジア中に作られる日本人町の基礎も、このような「もと倭寇」の手によってでき

あがって来たのだらう。

すでに述べたように、朝鮮半島では1510年、三浦に貿易拠点をついた日本人が、朝鮮の厳しい貿易制限に反発して乱を起こしている。おとなしいはずの海商も、貿易権をめぐる戦うのだ。商業と武力が結びついている以上、倭寇と海商は線を引くことができないが、それでも倭寇を海商化することこそ、このころの東アジアが一致して取り組んでいる課題だった。

そのころすでにイベリア半島からは、イスラム国家が消えてなくなっていた。1492年、コロンブスがインディアスを発見するために旅立った年、グラナダ王国が陥落したのである。700年に及ぶ、イスラム教徒とキリスト教徒の戦いは終止符を打ち、ヨーロッパは完璧にキリスト教域となった。やがて1510年、三浦で日本人海商が乱を起こした年、ポルトガルはインドのゴアを占領する。同じ年、アフリカ大陸の黒人がアメリカに奴隷として運ばれることになった。アジアの奴隷貿易が終わろうとしていたころ、ヨーロッパ人の奴隷貿易が始まったのだった。ポルトガルは次の年にマラッカを陥れ、アジアの商業の中心はマラッカとなった。ゴアとマラッカの陥落、南アメリカの銀山開発、アフリカ奴隷のアメリカ移入は、世界経済を一変させるのである。

16世紀は、様々な意味で世界が大きく変わる時期だった。ヨーロッパ経済にとってアジア貿易が不可欠なものであることは、古代から変わらない事情だが、そのアジア貿易はほとんど、ムスリム商人たちによって担われていた。そこにポルトガル人は強引に割り込んで行った。むろん、商業といっても武力をともなっていた。ゴア、マラッカ、そしてホルムズの三大商業拠点は、ポルトガル人アルブケルケがヨーロッパ人を率いて、このムスリムたちとの戦った結果、得られたものだったのである。

もうひとつ、世界を変えた大きな要因であった銀は、もともと、東アジアの朝貢貿易がその柱としていたものだった。日本では1530年前後から、朝鮮半島の灰吹法を導入して、本格的な銀生産が始められる。特に博多の豪商・神屋寿禎が開発した石見銀山は、日本のこのころの貿易を支える根幹となる。貿易商であるからこそ、銀がいかにかにアジア貿易に欠かせないものであるか、痛感していたであろう。1530年代末から中国貿易に支出された日本銀は、17世紀初期には年間200トンに達する。これは当時においては、世界最大規模の二国間

貿易だったと言われる。そしてこの交易は実際には、これを中継し、あるいはここから派生する琉球、朝鮮、東南アジア諸国を巻き込んだ、アジア交易圏を成していたのである。このアジア交易圏は、マラッカにおいてインド交易圏、アラビア湾交易圏、東アフリカ交易圏が相互に交わり、重なっていた。そこに、グジャラート商人をはじめとする各地のムスリム商人を割るようにして、ヨーロッパ人が入り込んでいたのである。

このように、16世紀の世界貿易は、中国を中心とする東アジア貿易に大きく依存していた。中国朝貢貿易を世界的視野から研究している濱下武志は、次のような興味深い見方を提示している（濱下、1990）。

ヨーロッパがアジアに参入しようとした一六世紀には、このように、アジアの側に銀に対する強い需要があり、かつ、その交易圏は歴史的に形成された独自の銀流通圏であった。そのことを踏まえて歴史を見直すと、一般に考えられている歴史の因果関係を逆転させて捉えることも可能になる。すなわち、アジアの銀吸収力がアメリカ大陸における銀の大量採掘を導いた、という見方である。

この視点から見ると、ヨーロッパがアジアを発見したのでもなければ、ヨーロッパの南アメリカ開発がアジアを変えたのでもない。その前から存在したアジアの自然産品および、中国の高度な技術産品がヨーロッパを引き寄せ、東アジア朝貢貿易に吸い寄せ、ついには、アメリカ大陸を発見させたのである。

確かにそうなのだ。コロンブスの出発はジパング伝説が動機のひとつであり、ヴァスコ・ダ・ガマの出発は東方からやってくるはずの救世者プレスター・ジョン伝説が、その動機のひとつであった。前者がアメリカ大陸を発見させ、後者がインドを発見させたのである。南米の発見は銀山の発見につながり、その銀山開発と水銀アマルガム精錬法の発明は、中国の銀本位制に対応するためにこそ、なされたのである。

川勝平太は、この次にヨーロッパに起こる生産革命についても、「人類史の普遍的な段階としての「農業」の次にくるものではなく、アジア文明に対する一つのレスポンスであった」という意見を述べている。この、近世以降にやっ

てくる日本とヨーロッパの生産革命については、あとで述べよう。

倭寇は16世紀にはすでに、国際海賊となっている。中国人がほとんどで、残りを朝鮮人その他が占め、日本人はほんの1、2割になっていたのだ。むしろこれは、日本の倭寇禁圧政策の結果であろう。日本人倭寇は南朝の遺臣とともに湯で煮られたか、奴隷として売り飛ばされたか、まともな貿易商に転身したか、あるいは、秀吉の時代にもっともはなはだしくなったように、組織が分断され、戦国武将たちの水軍に編成されていったか、のいずれかであった。しかし「倭寇」という様式は残った。それは長い歴史の末に形作られた文化のよなものであった。その形の中に、今度は中国人たちが入って行ったのだった。

雑多な国籍をもって大船団のジャンク船で動くようになった倭寇を、すでに日本人だけの集団と見る見方は減ってきていた。『明史』「列伝・外国・日本」の1554年の条には、「大抵眞倭十之三、從倭者十之七」とある。本当の日本人は3割で、それ以外が7割を占めるというのだ。さらに石原道博の引用によると、鄭曉の『皇明四夷考』には、1552年に倭奴が浙江省に入って以来、十年間にわたり、浙江や広東や江南の人は倭奴に従ったが、その倭奴というのは皆中国人で、日本人は十のうち一、二である、と書かれている。このほかの文献でも、1500年代の倭寇について述べた中国の記録は一律に、倭寇がその九割、あるいは全部、中国人である、と記している。同じく石原道博の引用によると、『皇明経世文編』に収められている朱統の『朱中丞翫余集』には、日本の諸島の人間のほかに、ポルトガル人、マレー半島のパハン人、そしてタイ人が含まれていた、とある。

このような国際倭寇集団は、もはや、海商と区別つけにくかったろうと思われる。かつての日本人倭寇が、その暴力の取り締まりこそが東アジア外交の要であり、日本は次第にそれを成し遂げて来た以上、もはや武力だけで商いできる時代ではなかった。スペインやポルトガルが戦争によってアジア・アフリカ・アメリカを植民地化したほどにも、この国際倭寇にとって武力は主要なものではなかった。それ以外にも、この後、武力によって他のアジア諸国をことごとく植民地化しようという動きなど、ただひとつの例外を除いて、アジアの歴史の中には存在しなかったのである。

ただひとつの例外、というのが、日本である。日本は一度目は秀吉の時に、

二度目は太平洋戦争の時に、ヨーロッパ列強に匹敵する巨大な植民地計画を立てたのであり、それは思惑どおり行かなかったとは言え、アジア諸国に問題を残してしまったのである。それはまた、ヨーロッパの植民地政策の結果、現在のアジア・アフリカ・南アメリカが様々な経済問題や民族対立を抜け出さきれないでいるのと同じことである。

武器の国、ニッポン

秀吉時代の植民地政策の出発は、すでに述べたように、鉄砲の導入にあった。もちろん理由はひとつだけではない。もっとも大きな理由は、世界最大の二国間貿易であった日本と中国との関係が、ヨーロッパの介入、とりわけ南アメリカ銀の介入によって、崩れてしまったことであろう。濱下武志の見解に従えば、これも東アジア交易圏の性格と中国の需要が自ら招いた結果だった。南アメリカの植民地化と、搾取と、アマルガム精錬法と、アフリカ奴隷と、現地人の奴隷化によって生産された南アメリカ銀は、まずアジア内貿易の様子をがらりと変えた。琉球のような、アジア貿易だけで生き延びてきた貿易国家は、たちまち衰退した。ムスリム商人は力を失った。途中から、東南アジア諸国を拠点にしてアジア貿易を展開しようとした日本は、すでに出遅れていた。ヨーロッパの動きの上に乗ろうとしたのだから、その衰退はやむを得ないものだったろう。

中国はマニラを拠点にしてスペインのガレオン船の持ってくる銀を吸収しはじめた。日本の銀の価格が落ち始めた。変化はアジアではなかった。ヨーロッパはただでさえ、ペスト以降の人口増加が始まっていたのだが、そこから来る食料不足、失業者の増加に加えて、南アメリカ銀の流入とアジア産品の増加が、急激なインフレを引き起こすのである。これは世界的なインフレであったので、やがて日本も江戸時代になると、長期的なインフレ状態に入る。

以上のような変化は、現代のように、急にやってくるわけではない。極めてゆっくりと進行してゆく。日本は南アメリカ銀によって急に貧しくなったわけではなく、むしろ焦燥とも見える活発な動きを見せはじめる。その、外に向かう危険な活発さは、ひとつは上記のような世界経済の、飛躍的だが、不安定かつ不透明で、予想不可能な動きが原因だった。世界も日本も、今まで経験しな

かったようなことを体験していたに違いない。何が起こるか予想できないのである。

もうひとつは、それにともなって、その不安定さと富の水先案内人のように登場したキリスト教である。経済の必要条件であった国内統一をようやく実現しかかっている時に、短い間で40万人とも言われる信者を獲得して列島を席卷してゆく宗教に対して、危険を感じない為政者がいるだろうか。しかし日本のキリスト教徒は弾圧されていたばかりではなかった。自らアジアの植民地化に積極的に参加し、自ら東南アジア貿易に従事し、鉱山開発にも熱心だった。異常に活発化してゆく日本の、ひとつの要素だったのである。そしてもうひとつの、日本の活発さの理由は、鉄砲つまり武器の大量生産であった。

秀吉の朝鮮半島侵略は、鉄砲の大量生産のひとつの結果だった。鉄砲が種子島に来た時も、フランシスコ・ザビエルが日本に上陸した時も、どちらも中国人海賊・王直の率いる倭寇船に乗って来たと言われている。真偽はわからないが、中国ジャンク船がポルトガル人を乗せて日本に向かっていることから見て、確かに密貿易船であろう。倭寇は16世紀には中国人を中心とするものだったが、その拠点は寧波近くの六横島の双嶼港や、福建の月港であった。そこを拠点とする中国人海賊に、1540年ごろ、ポルトガル人や日本人が加わって行った。中国人倭寇のひとりである王直は双嶼港を拠点とする海賊だが、手形の取引や財政に長じていたというから、彼等はむしろ、密貿易を行う海商と言っていいだろう。1545年、日本に行って博多商人・倭助才門ら三人の日本人たちを連れて戻って来たというが、実際は頻繁に海を渡り、行ったり来たりしながら商売を展開していたであろう。王直の拠点は日本の五島にもあり、そこでは王直は五峰と呼ばれていた。福江には今でも、王直の屋敷跡が残っている。

このような時期に日本に鉄砲が入り、ザビエルが来るというのは、確かに偶然とは考えにくい。朝貢貿易から閉め出されたヨーロッパ人たちは、中国海商たちに組み入れられない限り、ほとんど仕事ができない状況だったろう。すでにそのころ、鉄砲は中国人・ポルトガル人倭寇たちの扱う有力な貿易商品であり、意図的に日本に売り込みに来たことは間違いがないだろう。むしろ、そこに日本人も一枚加わっている。このときポルトガル人が日本を発見したなどとはとんでもない話で、日本人自身が武器の導入をもくろみ、日本人倭寇に案内

させたか、少なくとも、王直と日本人倭寇が、有力な商売先として、水先案内したであろう。

とにかく、この後に起こった驚くべき鉄砲のコピー生産を見ると、倭寇たちのもくろみははずれたかも知れない、と思える。日本人はたいまいの銀を払って輸入したのではなく、自国生産しはじめたのである。これが、今日にまで至るこの後の日本の道を暗示している。資源で生きられなくなった日本が選択した、あらゆる技術製品の技術開発、自国生産という道である。やがて3000挺の鉄砲を使ってなされた長篠の戦いで信長・家康軍が勝ち、秀吉が鉄砲隊を編成して朝鮮半島に侵略したことによって自滅し、関ヶ原の戦いで鉄砲を使用することによって家康が日本を統一した。鉄砲によって、中世が終わったのである。長篠の戦いは、世界で初めての、火砲を戦力の中核にした集団戦争だった。これは、火縄を木綿に、甲冑も軽い木綿に転換できたことによって可能になったという。それまで麻を着ていた日本人にとって、木綿は様々な面で16世紀以降の生活を激変させたのであるが、その最たるものが、戦法であった。

しかしなんといっても、鉄砲については、その生産スピードが、そのころの世界の中では圧倒的であった。この技術は、当時日本から中国や朝鮮に伝えられた、数少ない技術のひとつとなった。日本で鉄砲生産技術が普及した頃、倭寇の頭目のひとり、辛五郎というものが、中国にその技術を伝えた、という説もある。さらにこの後、対馬を通じて朝鮮半島に鉄砲が伝えられたのである。

すでに述べたように、朝鮮侵略では14～26%であった兵に対する鉄砲配給率は、関ヶ原の戦いでは40%にまでなった。しかし、すべての原料を国内で調達できるわけではなかった。国内の鉄だけでは間に合わずにインドのコロマンデル地方の鉄や、福建省やタイの鉄を輸入し、弾丸に使う鉛も国内だけでは足りず輸入に頼っていた。葉山禎作によると、イギリスに発注していたこともあるという。火薬に使う硝石は国内生産があまりできず、やはり東南アジアやイギリスから輸入している。梵鐘もつぶされていったが、秀吉の刀狩もまた、鉄の供給のために行った、という説がある。明や李朝朝鮮の成立がそうであったように、江戸幕府による国内統一に至る道も、世界的な経済状況、貿易、外交、ハイテク技術競争の中で作られて行ったのだった。

そのような道を歩んでいる日本を再びアジア諸国の眼で見ると、まずひ

とつは、中国との膨大な生糸・絹貿易や、タイからの鹿皮輸入、そして武器用の鉄・鉛・硝石の輸入に見られるように、金銀によってものを買いあさっているように見える。1570年ごろのマカオでは、生糸を大量に買いあさる日本に対応するために、対日生糸貿易組合（アルマサン）が作られた。日本側では、生糸の輸入価格決定を日本の商人に有利に進めるための、糸割符制度が作られている。このような、技術力はないが経済力だけはあって、アジア市場に大きな位置を占める日本、というイメージは、貿易商人たちの中で定着していたと思われる。

一方、倭寇が日本人の集団ではなく、もはや中国人を中心とする海商である、という情報は定着しはじめていた。中国・朝鮮が13世紀以来日本に要求し続けていた倭寇の禁止・管理も、ようやく完成した、と思われていた。しかしその矢先、それをまったく裏切る出来事が起きた。秀吉の思いついた、日本人による朝鮮・中国・東南アジア諸国一帯のアジア支配、という構想である。なぜこのようなことが思いつかれたか、朝鮮側が「大儀名分すらない侵略」と言っているように、なぜ大儀すら無い戦争をしかけざるを得なかったか、納得できる説明は依然として存在しない。しかし秀吉の国内平定のプロセスの中でごく自然にそれが出て来たように見えるのは、日本の戦国時代における「天下取り」の発想が導き出す当然の帰結であったからかも知れない。力の続く限り、無限にどこまでも天下を取って行く、という発想である。そこには「異国」という認識はない。地球上どこまでも同質の人間がいて同じ価値観が続くはずなのだから、武力で平定して行けば、国内と同じように手中に入るはず、という発想があるだけだ。宇田川武久は、秀吉が朝鮮で敗北した原因について、水軍の面から次のように推測している（宇田川、1983）。

戦国大名が指向した水軍組織は譜代の直臣をその頂点において、旧来の海賊衆の地縁的・血縁的な絆を分断させながら、より大名権力に直結した水軍組織を作ることにあった。豊臣政権のばあいも同様とみてよいが、戦国大名のばあい全国規模でそれが行われた。文禄・慶長の役の豊臣政権の水軍編成は対外戦にいどんでも国内戦の水軍編成とまったく同じというのは、つまり秀吉がこの対外戦を単なる国内戦の延長線上で考えていたこと

を示しており、日本水軍の不振もここらあたりに起因しているといえよう。

朝鮮半島に渡り、さらに物資や武器を補給し続ける上で重要な水軍についてさえ、国内の延長線上の発想でしか、考えられなかったようだ。秀吉のアジア支配構想の理由は、まさにこの、無限に延長する国内支配、という無知からくる思いこみによるのだった。よく言われる日本の島国的・鎖国的な発想、というのは、江戸時代ではなく、この時代にこそあったのである。

また、こういう考え方もあった。生糸・絹織物や、皮革や、鉄砲のための鉄・鉛・硝石そして薬物、香料など、国内生産できずに輸入し続けなければならないものは、アジアを支配できれば、そのまま自分のものとなる、という発想である。これは、当時のヨーロッパ人のもっていた植民地の考え方だ。秀吉がポルトガルやスペインの実際に行っていたことを、知らなかったはずはない。しかしもし、この秀吉の考え方どおりに、武力でアジア諸国を植民地化し、その産品を搾取していたとしたら、今日の日本はなかっただろう。

今の日本は、まさにアジアの物資を手に入れられないことから、作られていったからである。みずから生み出すほか方法がないからこそ、技術開発に乗り出した結果だからである。さらに、植民地化された地域と年中独立戦争を戦い、その後に独立させ、その経済力と文化力を回復させることは、極めて困難だったろう。それは、今の世界がアフリカや南米の問題をかかえながら、同じ状況をアジアで、もっと深刻に抱えていたであろうことを想像すればよい。秀吉は、世界にとっても、最悪のことを考えていたのである。

日本も異国も「同質」という考え方は、長年、中国・朝鮮と複雑な外交交渉を積み上げて来た歴史を、秀吉が継承していなかったことを示している。また「植民地化」の発想は、中国と東アジアのとってきた朝貢システムについての無知無理解を示している。戦国武将という存在はこのように、最低限必要な外交知識も持ち合わせず、東アジアの共通言語である漢字の読み書きもできず、結果として本を読んだこともない、という人間が日本を統治する、という恐ろしい側面をもっていたのである。自らの無知を自覚してそれを補助する人間たちを置く者もいるであろうが、秀吉はそれさえも死に追いやるタイプの権力者だった。

東アジアへの参入

すでに述べたように、秀吉の朝鮮半島出兵は二度にわたって行われた。一度めは1592年で、その時は中国をはじめとするアジア全体の支配を妄想した結果だった。ところが敗北して撤退したにもかかわらず、明に対して、信じがたいような和議案を提示した。ひとつ、明の皇女を、日本の皇后とすること。ひとつ、日本と明が、官船・商船の往来をすること。ひとつ、日本と明の大臣が、通好を誓うこと。ひとつ、朝鮮の南半分にあたる四道を、日本に割譲すること。ひとつ、朝鮮の王子および大臣一、二人を日本の人質とすること。これは和議案というより脅迫であり、事実、この案が蹴られると秀吉は1597年、二度目の侵略を実行する。今度は、中国をあきらめたものの、無理矢理朝鮮を割譲させるためである。これにも失敗し、1598年日本軍は撤退、1599年から1600年にかけて、明軍も撤退する。崔官によると、この、足かけ7年にわたる戦争で、明は20万人以上の兵を出し、800万両の銀を支払い、数十万石の兵糧を朝鮮に運び込んだ。日本はおよそ30万人の兵を朝鮮半島に送り、そのうち10万人は死傷したという。その後の朝鮮の米の生産量は通常時の3割にも達せず、生産可能な農地面積は5分の1になった。戦乱と餓死によって人口は激減している。明は出兵の疲弊がひとつの引き金となって満州族の侵入にみまわれ、王朝が崩壊した、とさえ言われる。明の滅亡は1644年のことである。豊臣家はこの疲弊のために、いとも簡単に徳川軍に敗れ、権力を失った。徳川家は朝鮮出兵をしなかったのである。この、思いつきの戦争は東アジアをただ疲弊させ、何よりも、中国と朝鮮の日本へのイメージを固定させてしまったのである。

1719年、475人の通信使一行のひとりとして申維翰が日本を訪れた。もはやこの時、時代は江戸時代であり、戦争と武器とを放棄し、日本が東アジアの文化国家のひとつになろうと努力しているさなかであった。にもかかわらず、彼は雨森芳洲と次のような会話をかわしている。雨森芳洲はまず申維翰に、こう問う。日本と朝鮮は互いに信義をもつ隣国であり、日本人は皆、朝鮮が礼をわきまえている国だということを知っている。にもかかわらず、「ひそかに貴国人の撰する文集を見るに、その中で言葉が敵邦に及ぶところは必ず、倭賊、蛮酋と称し、醜蔑狼藉、言うに忍びないものがある」。なぜ、朝鮮人は日本人を

そのような侮蔑的な言葉で呼ぶのか、と。すると申維翰はこう答える（申、1974）。

君が見た我が国の文集とは、何人の著であるかは知らぬが、しかしこれすべて壬辰の乱の後に刊行された文であろう。平秀吉（豊臣秀吉）は我が国の通天の讐であり、宗社の恥辱、生霊の血肉、実に万世になかった変である。我が国の臣民たる者、誰か、その肉を切り刻みて食わんと思わぬ者がいようか。上は薦紳（身分のある人）から下は厮隸（召使い）にいたるまで、これを奴といひ賊といってかえりみないようになり、それが文章に反映したとしても、もとより当然のことであろう。

しかし、こんにちにいたっては、我が聖朝は仁をもって生民を愛し、関市（釜山の倭館）して交易し、かつ日東国の山河に、すでに秀吉の遺類なきを知る。ゆえに、信使を遣わして和睦を修め、国書を交換し、大小の民庶がみな、その徳意を仰いでいる。どうして、あえて宿怨を再発させることがあるうか。

江戸時代になって新しい朝鮮との関係が始まって、日本人は、なぜいつまでも自分たちを「倭」と呼ぶのかいぶかり、一方朝鮮人たちは、秀吉への深い恨みを決して忘れることはない。すでに秀吉の関係者はいないので国交を回復しているのだ、と言いながらも、申維翰は大坂に着いて豊臣家の旧居を眼にすると、「毛髪なお凜々たるを覚える」。この嫌悪感はほとんど生理的なものだ。申維翰は芳洲に、「秀吉も、日本において、なにがしかの功德があったのではないか」と聞く。しかし芳洲は、「少しの功德もない」と答える。そして、秀吉は内乱状態にあった日本を統一する努力はしたが、彼は山犬や山虫の性が天の厄運に応じて生まれて来たような男で、その殺戮は、朝鮮だけでなく、日本国内でも家系を絶たれた者が多かった、と説明するのである。

このような記録からのみならず、朝鮮では17世紀には『達川夢遊録』『皮生冥夢録』、18、19世紀になっても『壬辰録』など、日本との関係を素材にしたものは、絶えることなく、書かれ続け、読まれ続けていた。戦争に巻き込まれた当事者であるから、これらは極めて具体的な描写に満ちている。しかし他方、

中国はもう少し距離を置いて、中国独自の事情の中に起きながら、『水滸後伝』のような物語に、日本のイメージを描いたのだった。

外交の時代、江戸時代

江戸時代は、「鎖国」というイメージとは反対に、ようやく本格的なアジアとの外交が始まった時代だった。徳川家は朝鮮戦争で疲弊しきった豊臣家を倒し、それまでに進んでいた全国統一の基盤の上に、初めての平和国家を意図的にめざした。朝鮮との外交は、文禄・慶長の役の直後に始まった。家康は三千余人の朝鮮人捕虜を送還し、間に立った対馬の宗義智を賞し、朝鮮側が示した要求どおり、家康の方から国書を送り、犯陵の賊（朝鮮王陵を犯した人物）の逮捕を約束した。そして1605年、さらに1300余人捕虜を送還した後、1607年、家康の招きで、504人の朝鮮使節団が日本へやって来た。家康はこの使節団を手厚く待遇したという。この後、1811年まで12回、国王名称問題^(註2)が解決した後の、1636年の正式な通信使から数えると9回、一度につき約4、500人に達する朝鮮通信使が日本へやって来るのである。

この、通信使の来日は、日本を中国に見立てた朝貢システムの模倣でもあった。1634年、琉球が薩摩を通じて、やはり使節を送るように求められ、1850年までに18回の使節を日本に送っている。これは朝鮮通信使の場合と異なり、漂流民の送還を契機にして、かなり脅迫的に始められた。1609年、薩摩藩が琉球に侵略し、尚寧王を日本に連行した結果、始まった使節なのである。また1633年には、松前藩を通して、アイヌ民族に対し、ウイマム（あいさつ儀礼）を強要している。そして同じ1633年、オランダ商館長に対しても、江戸参府を義務づける。この、朝鮮、琉球、アイヌ、オランダの日本に対するあいさつ儀礼をもって、幕府は自国を中心にした疑似朝貢システムを作り上げたのだった。これを「疑似」システムというのは、中国がその朝貢国に対して行っていたような、朝貢品に倍する賜給品を返している形跡もなく、軍事的な安全保障を与えてもおらず、この三民族が貿易の利を求めて、自ら朝貢システムに参加しているわけでもなく、中国が柱としていた「徳」のような価値観の上の柱を、日本がアジアを引きつけるものとして持つてはいなかったためである。しかし

この疑似朝貢システムには少なくとも、日本のめざしていた新しい将来像が見える。それは従来もっていなかったような「文明国」構想をもっていたことである。江戸時代の日本は、それまでの戦国時代の為政者たちと違うタイプの為政者を育てた。文字の読み書きができる為政者である。姜沆は『看羊録』の中で、次のように書いている（姜、1984）。

いわゆる将倭なる者は、一人として文字（漢字）を解する者がありません。……（中略）……武経七書は、人それぞれ捺印所蔵してはおりますが、やはり半行でさえ通読できる者がいません。彼らは、分散して勝手に闘い、それで一時の勝利を快しとして満足することはあっても、兵家の機変については聞いてみることもありません。

また申維翰は『海游録』の中で、次のように言っている。

今、その俗を観ると、文をもって人を用いず、文をもって公事をなさない。関白はじめ各州の太守、百職の官は、一人として文を解する者なく、ただ諺文（仮名）四十八字をもってし、ほぼ真書（漢字）数十字をこれに混用す。これで、状聞や教令をつくり簿牒や書簡もつくって、上下の情を通じあう。国君の指導が、おおむねかくの如くである。

このように見られていた野蛮国日本は、江戸時代、初めて東アジアで中国・朝鮮・ヴェトナムと対等になろうとした。軍事的支配によるものではなく、文化・文明の高さと技術力において、対等になることを決断したのである。江戸時代の平和主義、官僚機構の整備、インフラ整備、治安の高さ、教育水準の高さは、そのような幕府の姿勢からきている。疑似朝貢システムは、そのような文明国としての統一体を作り上げるためにも必要だった。幕府は、朝鮮、琉球、アイヌ、オランダ（バダヴィア）との外交関係を確立すると同時に、国内の各藩に対して、参勤交代制度を義務づけている。統一国家といっても、現在と違って、政治的、文化的、経済的に独立状態にあって、各藩はこのように、国内の朝貢国のごとき行動をとることになったのである。それは朝鮮、琉球との外

交目的と同じく、戦争状態を引き起こさないためのシステムであった。そして、このシステムゆえに、全国の道路網は整い、武士以外の人々の旅をうながし、飛脚制度や為替制度が確立し、船による運搬もより活発になり、物資と情報の流通は格段の発達を遂げたのである。武士の子弟の教育に力を入れるために、藩校を作り、中国から大量の書籍を輸入し、朝鮮や琉球からは復刻本を入れ、国内でも復刻が盛んになされるようになった。

儒学者も育ち、議論が活発になるに及んで、朝鮮は日本を、家康以降、兵乱のきざしもなく、民衆も国の富も極めて隆盛だ、と見るようになった。為政者にはまだ愚か者もいるが、贅沢な暮らしをしていて安楽に馴れ、汲々として有事をひたすら恐れている。秀吉のような賊が再び世に現れたとしても、もはや何も危険は無いであろう、と感想を書き付けるようにまで、なったのである。1631年の柳川事件を引き起こすきっかけとなった、日本が中国の朝貢国ではなく、家康が国王称号をもっていない、という問題を除けば、ともかくも、「外交」と呼べる関係をアジアの中で作り出し、幕府は、日本を東アジアの一員とすることに、成功したのだった。

世界システムの中の日本

疑似朝貢制度の中には、オランダ商館長の江戸参府も含まれていた。貿易は幕府によっておおよそコントロールされていたが、それには理由があった。江戸初期の日本経済は、そのまま自由貿易の形で世界市場にさらされるならば、壊滅するに違いない状態だったのである。

日本の東南アジア貿易は、秀吉時代から江戸時代初期の1630年代に至るまで、引き続いて行われていた。家康も海外貿易には決して消極的なわけではなく、メキシコに京都の商人を派遣して銀生産の状況を調べさせるなど、中国からの輸入や日本人町を通じた東南アジア諸国（タイ、ヴェトナム、フィリピン、カンボジア）からの輸入には意欲をもっていた。というより、生活を成り立たせるためには、輸入せざるを得なかったのである。江戸初期の人々の衣料の多くは、中国絹織物および、中国生糸とヴェトナム生糸の輸入に頼っている。香料はヴェトナムから輸入し、薬物は朝鮮と中国から輸入している。これだけ多

くの品目を輸入に頼ると、当然のことながら、大量の支払いをしなければならぬ。ところが、日本が支払い手段としていた銀は、生産量が落ちていった、というだけでなく、スペインの南アメリカ銀山開発によって、大きな打撃を受けたのである。それだけではなかった。現在のフィリピン、タイ、ヴェトナム、カンボジアにあたる地域に出来上がっていた日本人町の貿易商たちは、ポルトガルやオランダのアジア内物資運送の動きによって、不利な立場になってゆく。琉球王国がポルトガルの進出によって、貿易に拠っていた経済基盤を失ったように、日本もまた、アジア内貿易の利を見込むことができなくなってきた。そして、多くのキリスト教徒や浪人たちを抱え込んでいた日本人町を、幕府は最終的に見放し、切り捨てた。これは、日本経済の中国・東南アジアからの自立の過程であった。

『水滸伝』の続編『水滸後伝』に見られる「傭兵としての日本人」は、この日本人町の中で見受けられた。その中でもっとも日本人に語られてきたのは、オヤ・セナピモクこと山田長政である。彼はタイ人にやとわれた八百人の日本人傭兵の長であり、戦争時には二万人のタイ兵も率いたが、結局は自分を雇ったタイ人に裏切られ、毒殺された。商業相手の国の王朝問題に入り込み、貿易の利を狙って戦争に加担するのは、当時では決してめずらしいことではなかった。そして、結局は裏切られ、失敗している。にもかかわらず、今日、長政を日本人の雄飛の象徴として讃え、タイに銅像を建てる日本人たちがいる。その心理は、敗戦の責任者であったにもかかわらず、秀吉を賛美する心理とどこかで共通する。現在のように、たいいていの日本人が一度は海外に行く時代に、なお、一部の日本人たちは、武力をもって海外に飛躍した者を賞賛し、日本人の名誉のように思う。これは同じ日本人から見て、奇妙な心理である。

当時の日本経済や日本の地位にとって重要だったのは、まぎれもなく、国内で技術力をつけ、知性や思想を身につけることであって、長政のような行動は、当時の日本に、何の利益ももたらさなかったばかりか、ほとんど無関係だった。タイ人にとって何の益もなかったことも、明らかである。長政は単に個人的な商売上の利益のために行動したにすぎない。秀吉と違い、長政の行動はアジア人から強い非難を浴びるほどの性質のものではない。むしろ、このような人物を近代の日本人が讃えるその行動の方が、アジア人から見れば、よほど不思議

に写るだろう。

輸入品に対する支払いができなくなった日本にとって、選択できる道はひとつしかなかった。アジアからの独立である。川勝平太が述べているように（川勝、1992、1994）、日本とヨーロッパの最初の共通点はここにあった。アジアから輸入していたものを自力で作り出し、輸入を停止する、という方法である。石炭の動力を開発することによって、設備に資本を投下しつつ、中国・インドの技術を自分のものにしていったヨーロッパと違い、日本は、優秀な労働力を育てることによって、中国・インドの技術を自分のものにしていった。鉄砲生産、和時計の発明などに見られるように、「人」つまり職人に託された高度技術によって切り抜けて行く素地は、もともとあったのである。まず西陣工業地帯に起こった、プロフェッショナルたちの絹織物生産によって、もはや日本は絹織物の輸入を必要としなくなった。織物ほど急激ではなかったが、農村地帯で発達し続ける養蚕・生糸生産技術によって、生糸輸入も、江戸時代に徐々に、国内生産できるようになり、明治期が来てみると、それはいつのまにか、中国の技術を上回っていたのである。木綿の生産は16世紀に本格化したばかりだったが、オランダ経由でインド、インドネシアからの優秀な綿織物の輸入を経た後、完全に国産化された。薬物の中でもっとも高価であった朝鮮人参は、アジアで初めて、人工栽培された。食糧はもともと自給可能であった日本は、こうして、短い間にアジアからの独立を果たしたのである。

東アジア文明圏はかつて、「徳」という言葉を普遍的価値観として共有していた。鄭和はなぜ大航海時代を作り出せなかったか、という疑問が言われることがある。この言葉の裏には、「中国はなぜ世界を植民地化できなかったか」というニュアンスがこめられている。その理由として中国の政情不安や経済力などが挙げられることがあるが、これは典型的に西欧的なものの方であろう。「徳」の価値観は物理的な世界征服を必要としていない。文化（言葉や服装や宗教）上の征服すら、考えない。明は歴代漢民族王朝の中で、もっとも広い朝貢範囲をもった王朝だったが、その範囲は鄭和の航海の範囲にほぼ匹敵する。イスラム教徒である鄭和をもって、東南アジアのイスラム文化圏を「徳」の体系の中に組み込んだのであり、それ以上のことは必要ではなかったのである。この朝貢範囲は中国商人の交易圏ともなり、中国人たちが商人としてアジア諸

国に入り、その国の人間になっていく結果ともなった。道徳的なネットワークという割り切り方はできない。経済的活性のネットワークでもあったのである。

明は日本の姿勢にも大きな影響を与えた。南北朝の戦いの終息期から江戸時代のはじめまで続いた明の「徳」の影響力は、日本が他国を犯しながら拡大成長してゆくことをやめて、江戸時代という時代に転換する大きな原因でもあったろう。アジアに踏み込んでいこうとする日本の暴力を許さず、アジア全体を結束させてこれを防いだ。そして明自身が、その楯となり犠牲となった。その後日本は、みずから明のようになろうとした。価値観とは抽象的なものではない。行動することであり、その行動の軌跡に、結束や感化、というかたちのネットワークが形成されるのである。

江戸時代が出現した理由

東シナ海を時間軸で見ると、そこには地球規模の動きが流れ込んでいることがわかる。江戸時代が出現した理由は、まさにそこにある。箇条書きにすると、こういうことだ。

- ・コロンブスによる新大陸発見と、それに続くペルー、メキシコでの銀生産は1560年以降、年間45万キログラムにのぼり、それを中国に運び込むためにマニラ市場を開いた。年間20万キログラムが中国に入る。
- ・その結果、日本の銀は生産量の減少もあいまって経済力を喪失する。1609年、家康はメキシコとの通商と鉱山技師の派遣をフィリピン総督に依頼している。
- ・倭寇が多民族構成の海賊および海商となって、東アジア諸国間を動いていた。
- ・秀吉の朝鮮侵略は、アジアの変質と、日本の経済的疲弊をもたらした。
- ・もはや購買力をもたない日本は、国内生産技術を発達させることで、アジアからの経済的自立を果たさねばならなくなった。
- ・朝鮮侵略によって、人とともに多くの朝鮮文化と技術が日本に入り、それを「日本化」することで、技術の基礎ができた。
- ・中国や台湾との貿易、東南アジア日本人町から入ってきた東南アジアの文物、倭寇が仲介したポルトガル、スペイン文化の導入によって、多様で大量の外

国文化にさらされ、結果的に「日本」意識が生まれた。

単に戦国大名の戦いと勝ち負けだけでは、江戸時代体制はできてこない。信長、秀吉が実行してきた全国統一、石高制、兵農分離による城下町の形成が根底にあったのはもちろんだが、江戸時代と江戸文化出現の背景には、なにより地球規模での動きと、民族文化を揺るがす大量の異国文化・技術があったのだ。

近代における外国文化の影響と異なるのは、貿易自由化を強制されなかったことである。また、内戦を中止することで植民地化も回避したことである。江戸時代に終止符を打った、いわゆる「開国」は、産業革命後の市場を求めるアメリカ、ヨーロッパによって迫られることで起こった。しかし江戸時代の始まりは外圧ではなく、むしろ外圧を回避し、従来の拡大主義を収め、自国生産へ転換することでなされた。そこに、今後の日本の行く先を考える上での重要な姿勢がある。

私たちの現代日本は、表面的には核を否定しているが、実際はアメリカ合衆国の核の傘（安全保障条約）の下で、様々な条件を突きつけられながら政策を決めている。江戸時代の自立した日本とは、まったく異なっている。これは、和辻の言うように「鎖国をしていたから」ではない。グローバリズムの中で、自らのありようを見極められないからである。

本論では江戸時代に入る前の状況を中心に書いたが、それは私が自著においてすでに、中国、朝鮮、オランダ東インド会社、ヨーロッパ諸国とのやりとりのなかで創造された江戸文化について、書いてきたからである。文化・文学論も「鎖国」観に影響されてきた。「鎖国」を強調する際には、江戸時代前の状況を描くときもスペイン、ポルトガルの来港や宣教師の活動について書くことが多く、倭寇や大蔵経をめぐるやりとりや、朝鮮侵略について書くことが少ない。ポルトガル人が倭寇とともに海を動く海賊であった、という認識も無い。「鎖国」観を乗り越えて江戸時代を見るためには、欧米崇拜そのものを意識化し、乗り越え、アジア諸国との関係に注目するべきであろう。

注

- 1、網野善彦の研究に詳しい。
- 2、柳川事件：当時、中国の朝貢国の長はすべて、皇帝の臣下であることを示す「国

王」称号を使用していた。朝鮮は対等な外交関係を確立するために、日本からの国書に国王称号の記載を要求したが、日本は朝貢国ではないために、国王が存在しない。間に立った対馬の宗家は、国交を順調に回復させるために、国王称号を偽造するが、そのことが後に明らかになり、処罰される。1635年、朝鮮向け称号として「大君」を決定し、この件は落着する。この年、朝鮮の馬上才（馬上サーカス団）が使節とともに来日し、翌年から、正式な通信使の派遣が始まる。

引用・参考文献

- 石原道博 1964年『倭寇』吉川弘文館
 宇田川武久 1983年『日本の海賊』誠文堂新光社
 川勝平太 1992年「近代世界システムと『鎖国』」『文化会議 272号』財団法人日本文化会議および、1994年「新しいアジアのドラマ」「日・欧の近世」『新しいアジアのドラマ』筑摩書房
 姜沆 1984年『看羊録—朝鮮儒者の日本抑留記』朴鐘鳴訳 平凡社
 崔官 1994年『文禄・慶長の役』講談社
 申維翰 1974年『海游録』姜在彦訳 平凡社
 関根謙・編集 1988年『中国の教科書の中の日本と日本人』一光社
 「宣祖実録」1969年『朝鮮王朝実録』21巻、23巻 国史編纂委員会編
 宋希璟 1987年『老松堂日本行録—朝鮮使節の見た中世日本』岩波文庫 原本の執筆は1420年 底本として使用された古写本は1556年以前。
 ロナルド・トビ 2008年『「鎖国」という外交』小学館 日本の歴史9
 濱下武志 1990年「銀の流れでつながれた世界」『朝日百科・世界の歴史 67』このほかのすべての仕事において、濱下武志は、アジアの経済史を根本から見直す重要な指摘を行っている。
 洞富雄 1991年『鉄砲』思文閣出版
 『明史』巻322 列伝第210 外国3「日本」1974年 中華書局
 村井章介 1988年『アジアの中の中世日本』校倉書房
 引用部分のみならず、中世の状況についてはおおぼにこの文献を参考にした。そのほかにも、田中健夫1959年『中世海外交渉史の研究』東京大学出版局および1982年『対外関係と文化交流』思文閣出版、荒野泰典1988年『近世日本と東アジア』東京大学出版局を参考にした。
 和辻哲郎 1982年『鎖国—日本の悲劇—』岩波文庫（1945年より『思想』『展望』に掲載 1950年刊行）

<ABSTRACT>

The process leading up to the emergence of the Edo period

TANAKA Yūko

In this paper, I put forward the case for two main ideas. One is the assertion that the term of “Sakoku (national isolation)” should not be used when the history and culture of the Edo period are discussed. The wrong image of the Edo period was made by that term’s being used, even though it didn’t exist in the Edo period. I argued why that term had been used and what kind of Japanese thought had been contained in that word by referring to *National isolation: Japan’s Tragedy* by Tetsuro Watsuji. I think the following problems lie deep in the fixed idea of “Sakoku.”

- It is a kind of invention that “Sakoku” is used as if it really existed.
- The absolute worship of the West is behind the thought that “Sakoku” was wrong and “Kaikoku (opening the country to trade with Western countries)” is right. Despising and ignoring Asian countries can also be seen in it.
- The West worship is white worship. It shows a tendency to think the Western countries are all the same although Japan was concerned with such different countries as Spain, Portugal, the Netherlands, America, and so on.
- Expansion and going abroad with ambition is thought of as valuable. On the other hand, reduction, control and localism is thought of as worthless.

The other assertion is that movement around the world was involved in the appearance of the Edo period. I focused attention on the movement of Wako (Japanese pirates) from the 14th century to the 16th century. Various Asian countries were connected by Wako, and they led Europeans to Japan when it seemed

that trade and diplomatic relations didn't occur.

I also mentioned silver, which was the biggest factor for Japan in the global movement. I hypothesized the following reasons why the Edo period appeared.

- Wako who were composed of multiple races became sea merchants, and were moving between the various East Asian countries.
- After the new continent discovery by Columbus, silver was produced in Peru and Mexico, and the Pacific line and Manila port were opened so that silver might be carried to China.
- As a result, Japanese silver production was the greatest of the world, but its financial power in the world was lost.
- The aggression towards Korea by Toyotomi Hideyoshi brought about the economic exhaustion of Asia and Japan.
- Much Korean culture and technology came into Japan at the time of aggression, and by way of its "Japanization" the foundation of the technology was established.
- Japan, which had lost purchasing power, had to become independent from Asia by technical innovation and making domestic production.
- Amidst large quantities of foreign culture, such as the goods produced by the advanced technical skill of China, goods that came from Japan-towns of Southeast Asia, and Portuguese and Spanish culture mediated by Wako, "Japan" consciousness was consequently born.

For the reasons stated above, the Edo period became the age when formal diplomatic relations were arranged with foreign countries, ordinary people were living with the world product, and they touched the civilization of foreigners for the first time in Japanese history.